

# 神戸女学院中高部の英語教育

—1993 年 4 月～2020 年 3 月—

林 真理子

神戸女学院中高部のホームページには英語教育の方針として「英語で心が通じ合えることを目標に」という副題がついており、80 年以上も前から続く中高部英語教育の根幹：Crew Method（以下クルーメソッド）による英語教授法が謳われている。クルーメソッドについての論文はすでに多数存在するので、本稿では主に私が在職した 1993 年 4 月から 2020 年 3 月の英語教育について述べたい。

クルーメソッドの理念は不変だが、実際の授業での活用は時代背景や生徒のニーズ、英語科各教員の個性により多種多様に肉付けされ、深化されてきた。中高部英語教育に影響を与えた時代の変遷を羅列すると、他大学受験を目指す生徒の増加、中学部入学当初から学習塾に通う生徒の増加、いわゆる「ゆとり教育」の導入に伴う、学習指導要領に盛り込まれる語彙や文法事項の減少、小学校での英語教育義務化、入学以前にバイリンガル教育や英会話レッスンを受けたり、海外に滞在していたりした生徒の増加等が挙げられようか。それに伴い、英語科では、既修者も初心者もそれぞれが授業を楽しみ、着実に英語力をつけられる授業の模索が始まった。現在も多様な生徒に柔軟に対応できるよう、工夫を凝らしつつ、神戸女学院らしい英語教育の追究が続いている。

次に、クルーメソッドの特徴が一番よく表れている中学部の授業内容を簡潔に説明する。授業は原則として全て英語で展開される。中学部 1 年生（以下中 1）では主に耳から単語や基本的な文、まとまりのある話を導入し、幼児が母語を獲得するような過程で英語を習得することを大切にしている。1 時間目に

インターナショナル教員と日本人教員のペアティーチングで新しい教材を導入し、次の時間に日本人教員が時にはクラスを2つの小規模集団に分けたり、LLを使用したりして、復習中心の授業で学習内容の定着、深化をはかる授業形態が基本である。中1終了時までには英語の基礎構文や表現に数多く触れ、帰納的に英語の仕組みを理解するようになる。また、まとまりのある文を聞き取り、内容を理解したり、詩を暗唱したり、既習の単語や表現を用いて簡単な文章を英語で書いたりできるようにもなる。中学部2年生、3年生（以下中2、中3）になると、3人の担当教員が個々の進捗で授業を展開するので、進捗が早くなり、新出単語や表現、構文が増え、言語活動の幅も広がる。まとまりのある文章の導入も徐々に耳から活字を媒体とする活動にシフトしていく。中3になると、インターナショナル教員の授業が増え、まとまりのある英文を書いたり、簡単な議論をしたりする機会もできる。このような活動の結果、中3終了時までには実用英語検定の準1級、2級、準2級に合格する生徒が多い。

上記のような中学部の英語教育の過程で、時代の流れにより変化した部分を述べたい。1つ目は単語や表現、発音記号である。bib, trousers 等北米地域で使用頻度が低くなったものは他の語に置き換わった。ジェンダーの多様性やマイノリティへの配慮に伴う議論が起こると、先住民の呼称や国名、Mr./Miss/Mrs./Ms.の使用も変化した。“Everybody has ( ) own computer.”のような文の( )に入る人称代名詞を his/her にすべきか their にすべきか、アメリカ式のスペリングや語句表現だけではなく、他の英語圏の国や地域のものをいつ授業で導入するか等について議論もあった。特に低学年に教えると混乱を招くと思われる内容についてはわかりやすく工夫して指導している。言語は生きているので、このような変遷は今後も生じるだろう。

発音記号の扱いも時代の流れとともに変化した。私の中1だった1960年代後半には、1学期の中間検査で絵を見て英単語を発音記号で書く問題が出題されていたが、最近では、発音記号は正しく発音するために識別できればよいという考え方に代わり、発音記号で単語を書かせる問題は激減した。

2つ目は授業形態の変化である。21世紀になり、感染症やアレルギーへの対

策が求められる様になり、実施困難になった授業もある。クルーメソッドでは、語学初心者が、できるだけ絵や写真ではなく実物に触れ、五感をフル活用して理解を深化させる体験型の活動を大切にしている。この観点に立った”Oh My Darling Sugar Cookies”の単位では、インターナショナル女性教員と日本人教員が歌を歌いながらクッキー生地の手作りを見せ、授業後にクッキーを焼いて、生徒に配っていたが、現在では以前と同じ授業展開ができなくなった。

3つ目は教材の変化である。以前はほとんどすべての教材が教員作成のプリントや音声教材であった。しかし、生徒から、英語教員の大多数が女性で CD 教材等の男性の声が聞きづらくて困るという相談が多くなったため、2000 年代から中 2、中 3 の家庭学習教材として開成中学校・高等学校教諭 Daniel Stewart 氏監修の *Blue Book, Red Book* というリスニング教材を家庭学習課題として導入し、10 代の男女ネイティブスピーカーの会話を毎週聞き、復習テストで理解を確認するようになった。(付記：2021 年度から中 2 では TOEFL Junior 対策のできるリスニング教材を、中 3 ではそれに加え、National Geographic 社の *Pathways* を使用し、listening, speaking, critical thinking を強化していると、中高部英語科：稲垣教諭からご教示頂いた。)

加えて、中 3 では重要構文の復習や読解のスピード化のための家庭学習教材が必要であるという議論が 1990 年代にあり、その結果、英語科教員全員で *Trifolium* というオリジナル教材冊子を作成した。この冊子はよりよい内容にするため定期的に改訂している。

4つめに、パソコン（以下 PC）の普及により、教材のデータベース化、教員間の情報共有やデータ管理が飛躍的に進んだ。中学部では教科書を用いず、教員作成のプリント教材で授業を進めるので、教員によって授業で取り上げる単語・表現・文法項目が異なり、以前は次年度担当者からどの単語や表現が既習かわからないという声が上がることがあった。しかし現在では、毎年授業で使った新出単語、表現をデータ化し、共有フォルダーに保存し、次年度の担当教員がそれを参照して授業計画を立てている。また、担当教員作成のプリント教材や長文では、教員が原文を授業展開に合わせて書き換えたものを使用して

いるが、毎年、新しい教材を探し、一から作成するのには時間と労力がかかるし、過去に作成された教材の中には、他の教員も共有したいものが多かった。PC 普及のお陰でこのような教材のデータベース化、共有も可能になり、労力を削減することもできた。中 1 後半に口頭で導入される聖書の中にあるお話、中 2、中 3 で段階的に文字による導入に切り替えるために使用しているお話を多数蓄積できると、多様な作品を取り入れることができる。最近の生徒は古典と呼ばれる文学作品に触れる機会が減少しているので、時事的な内容の説明文や記事に加えて文学作品を紹介することによって生徒の視野も広がると思う。

5 つめは LL の活用である。2014 年にヴァージニア・クラークソン記念館が完成し、LL 教室が 2 室になった。すべてのブースに PC が設置されたので、LL での授業がより多様に展開できるようになった。以前は生徒の音声を録音する際、機器の不調によるトラブルがあったが、現在では教員がマスターコンソールを操作することにより、簡単に一斉録音できる。録音した音声のデータ保存や編集も容易になったのでシャドーイング練習や暗唱も効率的にできるようになった。画像提示装置、ランダムペア作成機能の活用によりペア活動や Show and Tell の活動もわかりやすく実施できるようになった。

英語動画も LL で見せることが多くなった。以前は映画や教育教材の DVD を見ていたが、21 世紀になると簡単なニュースや英語文化に関する無料で良質なオンラインコンテンツが多数授業で使用されている。個人的には低学年では、画像のない音声教材のほうが、内容に集中し想像力を養うのに適していると考えているが、良質な映像教材は、楽しみながら語学学習を進め、英語圏の文化を学ぶのによい教材であり、今後使用頻度が益々増えると思われる。

一方、クルー先生 (Angie Crew) の時代から現在まで脈々と続いている活動もある。例えば、有名な詩の暗唱や英語劇、英語の歌は、授業で頻繁に取り入れられている。詩のリズムや美しい言葉に触れ、英語のメロディを体に取り込むことは、特に初級学習者に必須であると思う。発音やリズムの練習として tongue twisters も取り入れられている。歌は中 1 で紹介される讃美歌や簡単な身振りのついた童謡に始まり、中 2、中 3 ではスタンダードナンバーから最近

のヒット曲まで網羅している。音楽好きの生徒も多く、リズムや言葉の流れから英語という言語を体感し、より自然な形で英語を聴いたり話したりできるようになる生徒が多くなったように思う。卒業生からは「英語の詩や歌の授業が楽しかった。歌詞や暗唱した詩の一節は今も覚えている。好きな作品は自分の子供にも紹介し、一緒に楽しんでいる。」という声を聞く。

インターナショナル教員が一人で中2、中3の授業を担当することも不変である。生徒参加型の活動を通して4技能5領域（聞く、読む、話す〔やり取り〕、話す〔発表〕、書く）の総合力を養成するだけでなく、英語を母語とする国や地域の文化を体験させることに注力している。季節ごとの行事関連の活動や、ファッションショー、ロールプレイ、アメリカ式の模擬卒業式等を各教員が工夫を凝らして実施している。語学学習はその言語を母語とする集団の文化を学習するということであると体得した生徒の中には、卒業後、様々な国でこの体験を応用して言語と文化を学習し、国際的な活躍をする人も多い。

英語科では、上述の中学部教育の集大成として、中3生の習熟度を測り、高等学部での学習に繋がりたいと、1990年代から3学期に Achievement Test を実施していた。中3担当の中高部教員が既習単語や文法事項等を考慮し、手作りの問題を英語科全員で検討して最終稿にし、読解、単語、文法の力を測る問題と、リスニングやライティングの力を測る問題に分け、2回実施していた。しかし、担当者によって問題の難易度が異なることがある、英語運用能力の客観的な判断材料が必要である、生徒各自の目標設定のためにわかりやすい目安が必要であるという議論の結果、2020年度から、3月に中2、中3で TOEFL Junior を実施するようになった。実用英語検定のように合否ではなく、スコアで結果が示されるので、生徒各自が英語力向上の具体的な目標を設定するのに適していると思う。

次に、高等学部での英語教育についても触れたい。和文英訳や要約、英文和訳や要約、複雑な文法事項の説明等、より高度な英語力を養成するため、「授業は原則としてすべて英語」というルールに縛られなくなる。2000年代初頭までは、日本人教員による長文読解中心の授業、文法解説や英作中心の授業、イン

ターナショナル教員によるオーラルの授業に分かれていたが、最近では5領域4技能の総合力を養うべく、1つの授業で1～2領域のみを扱うのではなく総合的な活動を扱うようになってきている。生徒の大多数が他大学受験し、中には海外の大学への進学を目指す人もいう現状の中、多様な大学入試にも対応し、卒業後、海外の人びとと英語でコミュニケーションをするだけでなく、英語で専門分野の議論をしたり、英語文献を読んだり書いたりできる英語力の基礎を身に着けることを目標に、より高度な英語活動を実践している。

私は高等学部2年生や3年生（以下高2、高3）の授業を担当することが多かったので、授業の形態としては、検定教科書は速読教材として扱い、発展教材として、関連テーマのオリジナル教材を用いることが多かった。最初に重要構文の確認や英作等の演習でウォーミングアップ、次に長文読解、最後にテーマについての自由英作やエッセイの課題を出し、各生徒が調べ学習をしてまとめた文を書き、理解を深めるという授業展開であった。アメリカの映画や TED Talks、オンラインコンテンツも時々教材として用いた。*Wonder*、*Patch Adams* の映画は特に生徒に好評で、鑑賞後に生徒たちが書いたエッセイも秀作が多かった。エッセイを家庭での課題にした場合は手書きする生徒が多かったが、授業中に各生徒が PC でテーマに関連した英語文献を検索したり、オンライン辞書で表現を調べたりして仕上げる場合は、スペリングチェックや語数表示の機能を利用し、自由に書き直しできるので Word でエッセイを書くのが標準となった。

1990 年代前半までは高3に英語科教員作成の読解・和訳・英作等の実力テストを課し、神戸女学院大学への進学の補助資料としていたが、その後 TOEFL ITP Level2 に代わった。しかし満点をとる生徒が続出したため Level1 に変更された。現在はよりきめ細かく、生徒の英語到達度を測り、生徒自身が学力向上のための目標を設定できるよう、高1の9月には TOEFL Junior を、高2、3の9月には TOEFL ITP Level 1 を全員が受験している。例年、本校生徒の TOEFL ITP の平均は、677 点満点中 500 点前後で、生徒の約 2 分の 1 が 500 点以上を、約 2 割が米国大学留学基準点とされる 550 点以上の得点をとって

る。最近では海外の大学に進学する生徒が増加傾向にあり、大学入学後に留学する人も多いので、国際標準のテストを定期的の実施することが今後も必要であろう。

このように中高部の英語教育を学んだ生徒は、言語を単にコミュニケーションツールとして習得するだけではなく、それを媒体に世界中の人たちと心を通わせ、専門分野の研究を深め、新しいものを創造し、発信し続けている。「中高部の英語教育で体得した学習法はどの言語にも応用でき、世界のどこでも繋がりを広げられるという自信につながっている。」という大勢の卒業生の言葉を励みに、中高部の英語教育が益々発展し、生徒たちにインスピレーションを与え続けるよう祈念して、筆を置く。

（元中高部長）